はるかな尾瀬

2008.03 vol.4
(財)尾瀬保護財団

VOL.4 2008.03

目　次

03 副理事長あいさつ
21世紀の新しい国立公園に向けて

04 リレーエッセイ
池の昼寝

06 エッセイ　尾瀬好日
福島県の尾瀬
「友の会」での出会い

08 現地情報
原をわたる風だより

09 連載コラム
『尾瀬の主治医に聞く・後編』
『尾瀬の変化を感じるココロ』

11 トピックス TOPIX
尾瀬認定ガイド制度の検討
尾瀬ボランティア総会開催される
尾瀬から地球環境への
メッセージを発信！

13 今年の尾瀬についてお知らせ

14 尾瀬保護財団からのお知らせ
寄付のお願い
「友の会」コーナー
イベント情報

「今月の表紙」

尾瀬沼ビジターセンター前より
燧ケ岳をのぞむ（4月下旬）

21世紀の新しい国立公園に向けて

財団法人尾瀬保護財団
副理事長　泉田　裕彦

昨年8月30日に日光国立公園尾瀬地域に会津駒ヶ岳と田代山・帝釈山の周辺地域を編入して「尾瀬国立公園」が誕生し、21世紀の新しい国立公園としてスタートしました。

当財団をはじめとした尾瀬関係者では、尾瀬国立公園の誕生を祝し、新しい国立公園への国民の理解と適正な利用を効果的に促進するため、尾瀬国立公園記念事業実行委員会を設置し、記念事業に取り組んでいます。

これまでに、尾瀬国立公園のロゴマーク制定、尾瀬サミット2007、記念イベント「おめでとう尾瀬！」、記念式典「尾瀬から地球環境へのメッセージ」、DVD及びパンフレット制作を実施し、今後は3月15日～17日に上野駅構内ガレリアでのPRイベントや今夏には国際シンポジウムなど、さまざまな事業により「21世紀の新しい国立公園・尾瀬国立公園」をアピールしていきたいと考えています。

また、平成20年度自然公園ふれあい全国大会が尾瀬国立公園において開催することが内定しました。国とともに尾瀬関係4県が連携して大会を開催することは、尾瀬の魅力を全国に発信するとともに、人と自然との豊かなふれあいの推進を通じて自然に対する理解を深め、自然を守り、次の世代に確実に引き継ぐことの重要性を再認識する良い機会となるものと考えています。

美しい景観とともに貴重な生態系を有する「自然の宝庫・尾瀬」は、ゴミ持ち帰り、マイカー規制、植生復元等、いろいろな取組みが先駆的に行われてきましたが、さらに関係者・地域が一体となって、21世紀の新しい国立公園にふさわしい保護・利用・管理運営のあり方や、魅力的でより良い尾瀬国立公園づくりを検討していきたいと考えています。

昨年の尾瀬の入山者数は、国立公園が誕生したこともあり、前年に比べやや増加しましたが、特定の時期や曜日、特定の入山口に集中する傾向は依然として続いています。

入山者数の減少は、尾瀬の自然を守っていく上で良い面もあるかと思いますが、尾瀬の良さを伝えていく機会が減っていくことにもなりかねません。環境に配慮し、環境に負荷をかけない中で、多くの人に訪れていただくことこそ必要ではないかと思っています。

新潟県としては、環境への負荷を少なくする観点から、入山口の分散を図るため、新潟県側の尾瀬ルート「魚沼から行く尾瀬」の周知に努めているところです。同ルートは尾瀬へ遊覧船を利用し、ブナの原生林などの自然度の高い地域を通るもので、豊かな自然を感じることができることから、さらに旅行業者とタイアップし周知に努めたいと思っています。

また、最近、旅行業界では旅行の際に移動等で排出されるCO2をグリーン電力証書のしくみ等を利用することでオフセットする「CO2ゼロ旅行」が発表されるなど、環境に配慮した新しい取組みが始まっています。このような商品が尾瀬でも企画されることを期待しています。

はるかな年月をかけて自然が作り上げた尾瀬は、かけがえのない自然です。環境に配慮しながら、多くの人に尾瀬へ来ていただいて、尾瀬のすばらしさ、自然のすばらしさ、感動を共有していただき、そして、広く自然環境、地球環境の保護を進めていきたいと思います。

今後とも、当財団へ御理解をいただくとともに、皆様の御支援をお願い申し上げます。

リレーエッセイ

池の昼寝

金井　弘夫

牛首三叉路から龍宮小屋に向かって300mほど行くと、右手に「へ」の字形の大きな池が現れる。尾瀬ヶ原には池がたくさんあり、本誌2巻で岩熊さんがその数は1800を超えると書いておられる。実はこれらの池にはすべて背番号がつけてあって、この池の背番号はNN3―23である。背番号がないとデータの整理ができない上、誰がどの池でどんな調査をしたかが後の人にはわからず、何世代にもわたる永い目で、尾瀬ヶ原を見続けることができない。

尾瀬を歩けばこれらすべての池を目にすることができるかというと、そうはゆかない。原という名前のとおり、大部分は平らだから、低い目線が草に遮られて目にはいらなかったり、それこそ「笠の下」に隠れてしまうような小さなものもあって、すぐ足元にあってもウッカリすると見落としてしまう。中にはブッシュに覆われていて、調査中に知らずに踏み込んで、ズブリと腿までもぐってしまったことさえある。

NN3―23番氏は、それらの中では誰の目にも入る池の一つである。しかしこの池を印象に留めた人はあまりいないだろう。春先はいざ知らず、夏になってもヒツジグサやオゼコウホネが二面に散らばっているわけではない。せいぜい水際にヒツジグサがいくらかあるだけなのだ、「時によっては」、池の底が水面に顔を出していることがある。「時によっては」とわざわざカッコをつけたのは、この池では毎年、底が水面から出たり引っ込んだりをくり返しているからである。

尾瀬の湿原は、隣同士の池でも地下での水の行き来が少ないと、岩熊さんが書いておられる。湿原はミズゴケや湿生植物の遺体が、永年にわたって層をなして積み重なっている。つまりミルフィーユ(またはバウムクーヘン)みたいな構造なのだが、池ごとに別なミルフィーユで互いの連絡がなく、おまけに生地の透水性が悪いのだ。

ヒツジグサの地下茎は、池の底のミルフィーユの上を這っている。この植物は、同じ仲間の蓮根のでわかるように、体内に通気組織が発達していて、炭素同化作用でできる酸素や呼吸でできた二酸化炭素をそこにため込む。すると当然浮力が生じ、池の底を浮き上がらせようとする。またミルフィーユの中に住んでいる微生物も、メタンガスなどの気体を発生し、それが積み重なった層の間にたまる。池をしばらく眺めていると、ときどきポコッポコッと気泡が出ているのがわかるだろう。地震などで地面が揺れると、ミルフィーユの生地の間の結びつきが弱くなり、浮力がかかっているものだから、池底の表層がはがれて浮き上がってくる。たいていの場合、表層はこわれてしまい、ヒツジグサの地下茎は水面近くまで上昇し、夏の暑さにやられて弱ってくる。こうして浮上して弱った結果、葉の大きさがとても小さくなったヒツジグサを、木道からでもしばしば見ることができる。枯れて腐りかけのものもある。そうなると、その池のヒツジグサは絶滅してしまうのでは、と心配するには及ばない。ヒツジグサの種子は池の底にたくさんバラまかれているし、浮き上がらなかった部分の地下茎がまた広がって、元の状態に戻ってしまう。2004年の新潟県中越地震のような大きな地震の後で、池の底があちこちで浮き上がったという話を聞かされた。

NN3―23の池でも、時期によって池の底が水面上に出ていることがある。けれどもそこにはヒ

ツジグサはついていない。ノッペリした泥の面に、カキツバタやスゲ類の小形の株がいくつか生えているだけである。ところが次の機会には水没していて、なにも見えない。この池底の浮沈は、その下の層との間に溜まるガスの多少によるものらしい。私が初めて尾瀬ヶ原の総合学術調査に参加したのは1979年だったが、そのときにもそうだった。そしてこの地底の露出は1951年に米軍が撮影した空中写真にも写っているのだ。ふつうはこういう池底露出は、次第にひびが入って崩れてしまうか、ミツガシワに捉えられて沈めなくなってしまう。ミツガシワは水面を横に走る、空気を含んだ大根のような太い茎があり、これが密生するとそこに他の陸上植物が後から定着して、水面を隠して陸化させてしまう。そのようにして消滅したかなり大きな池があり、今でもそこへ行くと地面がブヨンブヨンと揺れる「ゆるぎ田代」になっている。

NN3―23番氏は池の底が丈夫で破れず、ミツガシワにもつかまらず、少なくとも60年以上、水面に出たり引っ込んだりを繰り返している。その様子は、太っチョが風呂につかりながら居眠りをしているようだ。それとも健康器具の折り込み広告の、「使用前・使用後」の写真みたいだ。

筆者紹介
金井　弘夫（かない　ひろお）
東京環境工科専門学校講師
専門は植物地理学
著書に「日本地名索引」

▲中田代　最大露底の池【平常時】（底の泥炭は見えない）

▲中田代　最大露底の池【地震時】（底の泥炭が水面に露出）

エッセイ 尾瀬好日

「福島県の尾瀬」

福島県自然保護協会長
星　一彰

最初の尾瀬行きは1940年代、当時は遥かな尾瀬で、ふるさと桧沢村(現南会津町)朝出発、裏燧から三条ヶ滝、尾瀬ヶ原を通り燧ヶ岳を一周し、尾瀬沼から帰るのに3泊4日必要だった。檜枝岐集落は、茅葺きで屋根上にニッコウキスゲ、コオニユリなどが見られ、平家の落人のような雰囲気だった。三条ヶ滝では、現在は禁止となっている滝壺まで下降、約百㍍上空から落下する水の景観を楽しんだ。豊かな水量は、水力発電計画、尾瀬分水問題として長期間論争、'96年尾瀬ヶ原水利権放棄で幕引き、22年から74年間続いた不毛の論争だった。尾瀬ヶ原には木道がなく、ぬかる場所をさけ、縦横無尽に歩きまわった。途中二人の人を見ただけ、天国を歩く心地だった。木道は、'52年に山口営林署(現会津森林管理署南会津支署)が国有林内につくったのが最初とされる。

尾瀬沼に和船があったので、借りて沼を一周した。一行の元帝国海軍が上手に操船、大海原で遊ぶ気分、尾瀬の代表的な自然景観だ。

'72年から福島県尾瀬保護指導委員として、自然環境基礎調査と緑の復元事業に参加、調査研究成果は、毎年発行の「尾瀬の保護と復元」に報告された。

現在、地球上で最重要な資源・水の環境指標動物としてのトンボ類の生態調査を実施、約40種のトンボの生息状態から、豊かな水環境をクローズアップさせた。日本における高山性トンボは、カラカネイトトンボ、ルリイトトンボ、ルリボシヤンマ、カラカネトンボ、オオトラフトンボ、ホソミモリトンボ、エゾトンボ、ムツアカネ、カオジロトンボ、の9種とされるが、尾瀬にはすべてが生息していることが明らかになった。ムツアカネなどは、燧ヶ岳の中腹、標高1940mで羽化中も確認できた。

尾瀬のトンボ類の中で、もっとも人気のあるハッチョウトンボは、尾瀬ヶ原のみに多く生息し、尾瀬沼周辺および裏燧一帯にはまったく生息していない。尾瀬ヶ原は日本におけるハッチョウトンボ生息の最高地と考えられる。一日中の活動はほとんど直径約1m内のテリトリー(領分)に関連するものであり、大きな変動は認められない。オゼイトトンボ、エゾイトトンボ、アオイイトトンボ、アキアカネ、などの日周活動も、くわしく調査、トンボ類を中心とした、尾瀬の食物連鎖についての一部も明らかになった。

緑の復元作業では、特に裏燧・横田代の傾斜地復元対策を模索、長方形のブロックを千鳥足状に植え付け、水の流速を緩和させ、ブロックに沿ってミタケスゲなどを条播することも試みた。ミズゴケ類の復元が今後の大きな問題で、一度破壊された自然の復元には、気の遠くなるような長年月が必要なことが理解できる。

尾瀬国立公園が独立、拡張部は大部分が福島県で、会津駒ヶ岳、田代山には高層湿原も見られる。従来の調査研究を参考に、賢明な利用法が求められている。

▲トンボ類の生態調査【1973年8月13日　尾瀬ヶ原にて】

エッセイ 尾瀬好日

「友の会」での出会い

ボランティア 小野 悠

四十五年前、尾瀬に初めての一歩を踏み入れてから虜になった。造形美も良いが、自然の為せる技には叶わない。四月末から十月迄のほぼ半年、金曜夜十時に家を出て仙台・宇都宮・日光・中禅寺湖・いろは坂・金精峠・尾瀬戸倉迄四百キロ弱をひた走る。

一番バスに乗る。仲間の顔に出会う。鳩待峠で入山する人達を出迎える。どの顔も皆、輝いている。戻りの時間を聞いて、コースの案内、シャッタースポット、尾瀬での約束事等、手短に話す。そして、無事に素晴らしい尾瀬を堪能されるようにと願いを込めて見送る。八時半、交代の仲間達に入山口での案内を託して山の鼻への坂道を下る。爪先から尾瀬に来たとの熱い思いが伝わる。

原に出て木道に佇むと心安らぐ。頭のてっぺんまで感動に包まれる。至福の時である。

十月末、木道が、葉っぱが、湿原が凍る尾瀬の冬。決して人を寄せ付けない、厳しく長い眠りにつく。来春四月の目覚めの時まで落ち着かない。悶々とした半年の日々を送った。

何か出来ることはないか。それから始めたのが「尾瀬保護財団友の会」の会員を募ることであった。出会う人達全てに声をかける。お願いする。怪訝な顔に数え切れないほど出会った。優しく丁寧に話をする。十分後には二千円を手にしてお願いしますと多くの人達が応じてくれた。そしてご苦労様とも。

初めて知った。木道の上以外で味わう尾瀬の味を。何よりも遥か離れた東北・仙台の地で年間を通じて尾瀬と関われることが嬉しかった。そして、見ず知らずの新入会員の人達が知り合いの方に声がけしてくれた。初め、そよ風にさえ吹き飛ばされそうだった小さな輪が少しずつ少しずつ広がって、多くの人達の善意に支えられ揺るぎのない大きな輪になった。会社ぐるみで会員集めに奔走してくれるところも出てきた。誰しもが心の奥底に持つ琴線に触れる思いであった。流れ落ちる涙を抑えきれない場が何度もあった。

二年ほど前に友の会の集いを持った。質問攻めにあった。「尾瀬って何」「何処にあるの」「宮城に移せないの」年間二千円、一日六円の付き合いから始まるこんな楽しい会話が耳に心地良い。たまらない喜びであった。

「尾瀬の話をして」と乞われれば断らない。「現役引退後の豊かな老後を…」との催しが、仙台各地の市民センター（公民館）で、「老荘大学」、「生涯学習」と銘打って開かれ一〇〇人前後の熟年世代の人達に話をする。皆、目を輝かせて耳を傾けてくれる。終わればごく自然に「友の会入会案内」を配る。

・年に数回尾瀬の香りを一杯に含んだ便りが届く

・山小屋宿泊が一割引になる

このことを忘れず伝える。そこに笑顔で頷く顔、顔、顔がある。今年も頑張ろう。

▲尾瀬ヶ原で自然解説

現地情報

原をわたる風だより

平成19年12月 冬期調査報告

少々前の話題で恐縮ですが、山の鼻ビジターセンターより、昨年12月4～5日にかけて実施した冬期調査の様子をお知らせします。この調査は、閉鎖中の山ノ鼻地区の施設および尾瀬ヶ原の状況を確認する目的で行うものです。

調査日の尾瀬は、雪化粧をはじめたばかり。初冬の清んだ空気のなか、かんじきを足に山ノ鼻に向かいました。

▲至仏山

▲山の鼻ビジターセンター

【山の鼻ビジターセンター】

10月末の閉山に際し、ビジターセンターでは様々な冬対策を施しました。建物周辺では、室内への積雪のなだれ込みを防止する冬囲いの設置、出入口ひさしの補強など。また室内では、長期低温による破損を防止するために、電子機器を毛布で包み、給排水管からは完全に水抜きをします。一つ一つは大変な作業ですが、自分たちの手で建物を管理していると実感できる、楽しい仕事でもあります。

こうした措置の効果もあり、建物に異常はありませんでした。

【気象観測機器】

山の鼻地区には気象観測機器が設置されており、気温や湿度、降雨・降雪量などが一年を通して観測されています。シーズン中はここで得られたデータが日本気象協会に送られ、尾瀬地域の気象予測が行われていることから、登山情報を提供する重要な基地の一つといえるでしょう。

今回の調査では、公衆トイレ裏に設置された気象観測機器(左写真)およびビジターセンター内の自動記録装置について、正常な稼働が確認されました。

▲気象観測機器

【原の川上川橋】

設置した年の大雪で、供用開始する前に曲がってしまった『原の川上川橋』。以来冬支度は、橋板の撤去、残った本体部分を鉄パイプで補強、と慎重を期して行われています。今回は数十cmの積雪があったものの、橋に異常はありませんでした。なんとか一冬もちこたえてくれますように…。

さて、調査は竜宮巡回までの予定でしたが、悪天候のため牛首分岐で終了。これで来春の開山まで、私達も尾瀬としばしお別れです。

▲原の川上川橋

■連載コラム　『尾瀬の主治医に聞く・後編』

続・尾瀬から学ぶスローライフ　取材協力＝星野睦治さん（群馬県利根郡片品村土出）

「尾瀬管理保護センター職員として、昭和40年後半に群馬県奥利根学術調査に同行しました。この調査は昭和29年の利根川源流部特定のための調査に続き、初の学術調査でした。私は航空写真から、尾瀬周辺の山々に点在する湿原を確認する作業にあたりましたが、特定が難しい湿原が一つあり、片野先生（尾瀬保護専門委員）と大白沢山方面に行きました」。

山の鼻ビジターセンター職員として、尾瀬一筋50年の「むつあにい」、星野睦治さんが話し始めてくれました。

発見!!　睦治田代

「山に分け入った私たちは、外田代周辺の山あいに小湿原が点在する複雑な地形を探し歩き、1日がかりで目当ての湿原にたどり着くことができました」

やっとの思いで発見した幻の湿原について、「大きさは研究見本園の半分くらいで、さらにその半分は浮島の無い大きな池塘で占められていた。周囲が背の高い針葉樹で囲まれているため、ヘリコプターで見つけることは困難だったようだ。尾瀬には未知な部分が多く残されており、改めて面白いと感じた」と星野さん。

その湿原は同行した片野先生により「睦治田代」と命名され、今は訪れる人もなく、ひっそりと存在している。

▲「睦治田代」でたたずむ星野さん（昭和47年）

センターの日常

尾瀬管理保護センターでは、どんな仕事をしていたのでしょうか。

「私を含めて3人の職員が働いていました。当時は群馬県教育委員会の依頼で、荒れた湿原の復元作業を中心に行っていました。尾瀬で最初に湿原の復元作業に取り組んだのが私たちで、学術の先生たちの指導を受けながら試行錯誤の連続でした」と苦労をにじませる星野さん。その一方で、

「職員3人とも得意分野があって分担していました。私は料理が得意で、先生たちがセンターに宿泊する時には料理を担当していました。食材が乏しい場所ですから色々と工夫しましたね。でも人に説明するのがめっぽう苦手で、登山者に尾瀬を紹介するレクチャーは他の2人に任せっきりでした」と笑いながら話してくれました。その後、建物は平成5年に尾瀬山の鼻ビジターセンターへと生まれ変わりましたが、星野さんの仕事にも変化はあったのでしょうか。

「職員が6人に増員され、私は木道補修などの外仕事を多くやるようになりました。地道な作業ですが、傷んだ木道を直していると通りかかった登山者から感謝される事も多く、やりがいを感じる仕事です。面白いもので、ケモノや魚も居心地の悪い場所は通らないし止まらない。補修の行き届いた木道には動物の足跡があるけど、傷んだ木道には見あたらない。そんな動物たちから、自分の仕事の大切さを教えてもらった事もあります」と星野さんならではの仕事ぶりを教えていただきました。

▲尾瀬管理保護センター（昭和48年）

自分で歩き、見ること

平成17年に尾瀬を下り、今は麓で炭焼きをしている星野さんに、尾瀬の魅力を伺いました。

「何が面白いかと聞かれても、尾瀬はどこに行っても、何を見ても面白い。一つひとつを取り上げて、これが魅力とは言えない」と星野さん。それでもご自身の経験から「これだけは」と話してくれました。

「尾瀬の魅力を知りたければ、尾瀬を一人で歩くことだ。連れて行ってもらったりも良いが、自分で歩き、見ること。そうすれば自分だけの確かな尾瀬を知ることができる」と語る姿には、「尾瀬の主治医」としての、尾瀬との接し方がにじみ出ていました。

▲星野さんの尾瀬の話は尽きない

続・山小屋主が語る尾瀬の秘話

取材協力＝龍宮小屋（群馬県片品村戸倉）

尾瀬ヶ原の中央部に位置する竜宮は尾瀬各地からの木道が行き交う十字路で、広大な尾瀬ヶ原が一望でき、湿原植物が咲き誇るハイカーに人気の場所です。そんな竜宮十字路で、古くから山小屋を営む龍宮小屋の萩原澄夫さんにお話を伺いました。

竜宮に小屋を建てた理由

「私の曾祖父は福島県の檜枝岐村出身でしたが、片品村へと婿入りしたそうです。当時の尾瀬は地元の人が入山し、自由に小屋を建てては魚や山菜を採る場所だったと聞いています。本当の理由は分かりませんが、檜枝岐にも片品にも関わりのある曾祖父が、両県の県境である竜宮に小屋を建てたのは自然な成り行きだったのではないでしょうか」と雪の降る片品村の自宅で、萩原さんは話し始めてくれました。

「山小屋は昭和22年に祖父・善作が始めたと聞いています。場所は今の竜宮十字路付近でしたが、その近くで竜宮現象が見られ、既に竜宮と呼ばれていたことから『龍宮小屋』と名付けたようです。現在の位置に山小屋を曳いたのは景観上の理由からだと思いますが、年代ははっきりしません。初代の山小屋は昭和38年の除雪作業中に焼失し、現在は3代目の建物です」と昔の話を思い起こしながら話す萩原さん。

▲龍宮小屋露天風呂（昭和26年、竜宮小屋提供）

「火事の時は厳冬期の尾瀬で全ての物が燃えてしまい、約4.5Km離れた山ノ鼻へ助けを呼ぶために戸板を使ってラッセルをしたそうです。そんな苦い経験もあって、龍宮小屋はランプを全廃しました。父は今でも火の取扱いに慎重ですね」

幼少時代から小屋主になるまで

萩原さんに幼少時代の尾瀬の記憶を伺いました。

「記憶はありませんが、最初に尾瀬に行ったのは3歳の時だそうです。夏休みは幼少時代であれば遊びに行き、学生時代であればアルバイト目的で、毎年必ず尾瀬に入山しました。幼い頃の思い出では、当時単線だった木道で、対面した登山者とジャンケンをして道を取り合った事や、夕立後の軒下にウジャウジャいたドジョウを捕った事が印象に残っています」と嬉しそうに話す萩原さん。そんな萩原さんが先代から龍宮小屋を任されたのは22歳の時だったそうです。

「当時はまだ嫌々ながらという状態でした。子どもの時から過ごしてきた山小屋なので勝手はわかるけどしんどかったです。そんな時に助けてくれたのが従業員です。あるベテランの従業員が自分の子どもを連れて来ていた頃は、働いてもらう代わりに、私がその子の面倒を見ていた事もあります」と振り返る萩原さん。しかしそんな従業員との連携が、現在の龍宮小屋のアットホームな雰囲気を作っているという。

「自分が辛かった経験もあって、従業員を叱るのではなく、いかに前例に捕らわれず、良い働きをしてもらえるかを考えるようになりました。普通の山小屋であれば帳場（受付）は小屋主が仕切りますが、龍宮小屋では全ての従業員が何でもできるようになることで、私も余裕が生まれ、小屋を訪れた入山者とコミュニケーションを楽しめるようになりました。この小屋で頑張っているのは従業員なんですよ」と顔をほころばせながら龍宮小屋の経営観を話してくれました。

▲現在の龍宮小屋も萩原さんと同様に3代目

尾瀬の変化を感じるココロ

若くして山小屋主となり、口にはしないが様々な苦労をされた萩原さん。意外にも小屋主としての初任給で買ったのは「尾瀬を撮影するためのカメラ」だったという。

「龍宮小屋は著名な写真家が以前から宿泊していましたが、私は常に尾瀬にいる者として、尾瀬の変化を記録するために撮影を始めました。最初は風景を漠然と撮影していましたが、やがてテーマを決め、場所を決めて尾瀬を見ることで、僅かな変化を感じられるようになりました。撮影中に白い虹を見た事も感動的でしたが、ある植物が毎年少しずつ移動している事を発見した時も同じ感動

尾瀬認定ガイド制度の検討

今年度、尾瀬保護財団を事務局として、尾瀬におけるガイド制度を検討する尾瀬認定ガイド制度研究会が立ち上げられました。ガイド制度は「尾瀬認定ガイド制度」と名付けられ、その検討も3月7日(金)の研究会を最後に終了しました。これまで検討されていた内容は報告書にまとめ上げられる予定になっています。

ガイド制度は制度運営主体となる「尾瀬認定ガイド協議会(仮称)」に引き継がれ、平成21年度からの施行を目指し、次のステップへと進んで行きます。

▲第4回認定ガイド制度研究会(東京:都道府県会館)

尾瀬ボランティア総会 開催される

2月23日(土)に埼玉県さいたま市にある青少年宇宙科学館で、第12回尾瀬ボランティア総会が開催されました。約70名ほどのボランティアが参加して、活発な意見交換が交わされました。

今年から尾瀬国立公園の拡張区域もボランティアの新たな活動場所となりましたので、尾瀬ボランティアに対する期待も大きくなっています。特に新しい区域では大切な自然を守るため、尾瀬のように入山に関するマナー啓発を普及させていくことが求められています。

尾瀬ボランティアの活躍に今後も注目です。

▲第12回尾瀬ボランティア総会(青少年宇宙科学館)

をおぼえました」と、尾瀬を見る視点を感じたひと言でした。そんな萩原さんにとって、今の登山者はどの様に映っているのでしょうか。

「みんな歩くことや目的地に到着する事にしばられていると思います。本当に尾瀬を感じたいのであれば、時間にしばられない歩き方をしてもらいたいですね。キーワードは『倍時間・倍楽』です。地図に書かれた所要時間の倍を使って楽に歩くこと。時には同じ場所にたたずんで、尾瀬の自然の移り変わりを見てもらいたいですね」と萩原さんは穏やかな口調で、尾瀬の真髄に触れるアドバイスを教えてくれました。

▲龍宮小屋前で訪れた人と話す萩原さん

龍宮小屋
(片品村戸倉652)
■問合せ先
0278-58-7301
■宿泊料金
1泊2食8,500円
■営業期間(例年)
4月下旬～11月上旬
■URL
http://www.oze.gr.jp/~ryugu/

尾瀬から地球環境へのメッセージを発信！

昨年12月23日、尾瀬国立公園の誕生を記念して、尾瀬国立公園記念事業実行委員会の主催により、尾瀬国立公園記念式典「尾瀬から地球環境へのメッセージ」が日本消防会館ニッショーホール（東京都虎ノ門）で開催されました。

雨が上がり晴れ間も覗いた午後1時、およそ660人の参加者を迎え、第1部「みんなで考える尾瀬と自然環境」が開会。はじめに同実行委員会を代表して、大澤正明委員長（群馬県知事）が「多くの人によって守られてきた尾瀬の独自性が認められたことは大きな喜び」と述べ、「一人一人が地球環境のためにできることを考え、それぞれの立場で、尾瀬の貴重な自然を守り続けていくことを力強く発信していきたい」とあいさつしました。

▲左から、大澤委員長、環境省櫻井自然環境局長、後援の文化庁本間調査官、林野庁藤江部長

続いて共催者である環境省の櫻井康好自然環境局長が「尾瀬は全国の国立公園のパイオニア的な存在であり、歴史的にも非常に意味のある地域。この尾瀬の素晴らしい自然を皆様方とともに守り、後世に伝えていく決意を新たにしたい」と語りました。

続いて、先立って8月31日に発表された「尾瀬国立公園ロゴマーク」の表彰式が行われ、最優秀賞を受賞した小原朱子さん（東京都）ほか優秀賞、佳作、特別賞の皆さんに賞状と副賞が贈られました。優秀賞の副賞は、尾瀬周辺地域の特産品として、檜枝岐村から「はんぞう」（そば打ちなどに使うこね鉢）、片品村から版画家・小暮真望さんの尾瀬の版画、魚沼市から魚沼産コシヒカリ15kgが各市村長から贈られ、会場を盛り上げました。また佐藤雄平委員（福島県知事）から受賞者の方々へ「どの作品も力作揃いで甲乙つけがたく選定に苦労した。（採用作品については）末長く親しんでいただけると確信している」とお祝いの言葉が贈られました。

次に、東京大学名誉教授の養老孟司氏から「自然環境を肌で学ぶ」、ラムサールセンター事務局長の中村玲子氏から「ラムサール条約の尾瀬」、九州大学大学院教授の赤木右氏から「湿原から考える地球・人間環境」と題して講演をいただきました。尾瀬の自然環境の中で五感を磨く大切さ、世界的に見て貴重な湿原である尾瀬を保護しつつ賢明に利用する重要性、化学的な観点から分析した尾瀬など、異なる切り口で語られた尾瀬について、観客は熱心に聴き入っていました。

講演の後は、第Ⅱ部「みんなで楽しむ　尾瀬と地域文化」をテーマに尾瀬周辺地域の伝統芸能が披露されました。片品村より「尾瀬太鼓」、魚沼市より「魚沼はねおけさ」「こまか広大寺」の唄と踊り、檜枝岐村からは「檜枝岐歌舞伎」が上演されました。熱気溢れる迫力の舞台に会場は大いに盛り上がり、盛んな拍手が贈られました。

▲特別講演の養老孟司氏

尾瀬の関係者がそれぞれの立場で環境保全に取り組み、みんなで尾瀬の自然を守り続けていることを地球環境へのメッセージとして発信するとともに、会場に集まった参加者が手を携えてかけがえのない自然や文化を後世に伝える志を一つにし、およそ4時間の幕を閉じました。

今年の尾瀬についてお知らせ

東電尾瀬橋は工事遅延のため、開通が平成20年7月以降の見込み

老朽による架け替え工事中の東電尾瀬橋は、19年度の工事をすべて終了しています。しかし、昨年の台風・大雨等の影響により作業が遅れており、当初は平成20年5月開通を予定していましたが、7月中旬以降となってしまう見込みです。ご迷惑をおかけしますが、コース選定の祭にはご注意ください(問い合わせ先:尾瀬林業(株)、0278-58-7311)。

温泉小屋道が廃道、利用閉鎖へ

温泉小屋道は利用が少なく、荒廃が著しいため、平成20年シーズンから利用閉鎖となります。燧ケ岳登山には見晴新道をご利用ください。

ナデッ窪登山道は管理者不在のため、登山道荒廃が著しく、今後の利用に注意

尾瀬沼南岸ルートの状況が悪く、転倒事故が多いため、北岸を利用ください

至仏山ルールに留意して登山をお願いします(詳しくは同封のお知らせをご覧下さい)

至仏山には時期別のルール(大型連休、5月11日~6月末、7月上旬、)や、場所別のルール(東面登山道)、そしてトイレとストックの取扱いについての注意があります(問い合わせ先:尾瀬保護財団、027-220-4431)。

交通規制は鳩待峠・沼山峠とも19年度と同様(詳しくは同封のお知らせをご覧下さい)

尾瀬の総合情報配信サイト「尾瀬なび」の機能が拡充されます

昨シーズンより尾瀬保護財団ウェブサイト内で運営されている「尾瀬なび」ですが、多方面の方にご利用いただき、アクセス数が30万件を超えました。今シーズンに向けてより機能を充実させる予定ですので、尾瀬トレッキングや尾瀬学習に活用ください。

寄付のお願い

尾瀬保護財団では広く寄付をお願いしております。

当財団は、尾瀬において、利用者に対し自然への理解を深めるための解説活動や、適正な利用に関する普及啓発を実施するとともに、各種の環境保全対策や施設の管理運営等を実施し、尾瀬の優れた自然環境の保全に寄与したいと思っております。

■企業・団体の皆様とより良いパートナーシップを築けるよう、下記の制度があります。

種　類	条　件	特　典
特別協賛寄付	3年に渡る毎年30万円以上の寄付、または一時の100万円以上の寄付	①財団機関誌、財団機関誌、財団ホームページに企業等名称、ロゴマーク、メッセージを1年間掲載 ②尾瀬国立公園ロゴマークの取扱要領に基づき使用申請ができ、許可後は無償で1年間使用
協賛寄付	3年に渡る毎年10万円以上30万円未満の寄付、または一時の30万円以上100万円未満の寄付	①財団機関誌、財団ホームページに企業等名称を1年間掲載

■寄付をいただいた皆様に財団機関誌「はるかな尾瀬」を所定の期間お送りします。

■尾瀬保護財団は「特定公益増進法人」に指定されており、当財団への寄付は税の優遇措置を受けられます。

■寄付につきましては、財団事務局(群馬県庁17階・027-220-4431)に御来訪いただくか、財団に御連絡をいただいた上、右の口座にお振込をお願いいたします。

福島県	東邦銀行県庁支店	普通	1078095
	福島銀行本店営業部	普通	0590088
	大東銀行福島支店	普通	1287138
群馬県	群馬銀行県庁支店	普通	0515428
	東和銀行本店営業部	普通	0975531
新潟県	第四銀行県庁支店	普通	1182791
	北越銀行県庁支店	普通	0199366
	大光銀行新潟支店	普通	0837334

特別協賛寄付者の御紹介

※五十音順、敬称略

株式会社群馬銀行

尾瀬紀行(信託ファンド)で収受した信託報酬の一部として118万円余りを御寄付いただきました。

寄付者からのメッセージ:信託報酬の一部が尾瀬保護財団への寄付となる仕組みの投資信託を取扱っており、多くのお客さまの善意の集大成を寄付させて頂きました。趣旨にご賛同頂き投資信託をご購入頂いた全てのお客さまに深く感謝いたします。

興銀第一ライフ・アセットマネジメント株式会社

尾瀬紀行(信託ファンド)で収受した信託報酬の一部として301万円余りを御寄付いただきました。

寄付者からのメッセージ:尾瀬の美しく貴重な自然を後世に受け継ぐために今回の寄付金が有効に活用され、環境保全の一助となることを期待しております。DIAMはこれからも金融の仕組みを通じて、社会に貢献する資産運用会社を目指します。

株式会社第四銀行

尾瀬紀行(信託ファンド)で収受した信託報酬の一部として75万円余りを御寄付いただきました。

寄付者からのメッセージ:尾瀬の自然環境を後世まで末永く守り続けるため、今回の寄付金が有効に活用されることを期待しております。第四銀行はこれからも尾瀬の自然環境保護を支援すると共に、地域社会の発展に貢献してまいります。

株式会社東邦銀行

尾瀬紀行(信託ファンド)で収受した信託報酬の一部として79万円余りを御寄付いただきました。

社団法人日本損害保険代理業協会

尾瀬国立公園記念式典とPRイベントで使ってほしいということで100万円の御寄付をいただきました。

寄付者からのメッセージ:本会は、植林活動や自然保護活動に実績のある団体を支援するための基金を設置し、寄付を行っています。大変美しい尾瀬の保護活動を支援するため、財団法人尾瀬保護財団が尾瀬国立公園記念事業として行う記念式典&記念PRイベントへの協賛団体として、寄付させていただきました。

協賛寄付者の御紹介

※五十音順、敬称略

尾瀬山小屋組合

尾瀬保護財団設立当初から毎年、御寄付をいただいております。今年は22万円余りを御寄付いただきました。

群馬県庁福利厚生事務協力会

財団の活動に対し、50万円の寄付金をいただきました。

新潟証券株式会社

尾瀬紀行(信託ファンド)で収受した信託報酬の一部から27万円余りを御寄付いただきました。

協賛寄付者(機材)の御紹介

※五十音順、敬称略

キヤノン株式会社

財団事務局、ビジターセンターの情報収集用としてデジタルカメラ7台とハイビジョン・デジタルビデオカメラ3台、およびその他付属機材を御寄付いただきました。

パタゴニア日本支社

早春、晩秋のビジターセンター職員の防寒着、冬季の除雪作業用としてダウンジャケット、ダウンセーター計30着を御寄付いただきました。

その他の寄付

※五十音順、敬称略

今井 隆一、片品山岳ガイド協会、学校法人 重里学園 国際環境専門学校、高橋　久信、株式会社ニチネン、柳原　政一、山本　邦夫の皆様から御寄付をいただいております。ありがとうございました。

(平成19年10月16日～平成20年1月31日までに御寄付いただいた方を御紹介させていただきました。)

「友の会」コーナー

「友の会」は豊かな尾瀬の自然を守る財団の
活動を支援してくださる方々の集まりです。

☆新会員制度について

尾瀬保護財団では新しい会員制度としてユース会員(22歳以下)、家族会員(個人会員の同居家族)の制度を検討しております。いずれも会費が個人会員よりも割安になる予定です。

新会員の募集は4月以降の予定です。

☆卓上カレンダー配布の廃止について

「財団への実質的な支援増を」との声も多いことから、平成20年度より卓上カレンダーの配付を取りやめることになりましたのでご了承ください。なお、通信販売は例年通り行う予定です(友の会会員の割引を別途検討中)。

☆自動払込、自動振替をご利用の方へ

平成19年度までに既に自動払込、自動振替をご利用されている場合、平成20年度の会費は5月末に振替させていただきます。

☆メールクラブのご案内

「友の会」会員を対象に、登録をいただいた方に尾瀬のいろいろな情報をメールにてお送りする「めーるクラブ」を行っています。

次のシーズンに向けて、ぜひ、ご利用ください!!　(登録は財団ホームページから)

年会費

◎個人会員
1口　2,000円

◎賛助会員(団体・法人)
1口 10,000円

イベント情報

尾瀬国立公園記念イベント

○"春の尾瀬"天井の楽園へ

日　時／3月15日(土)～17日(月)

場　所／JR上野駅ガレリア

(主催／尾瀬国立公園記念事業実行委員会)

山の鼻ビジターセンター

開所(予定)　5月11日(日)

尾瀬沼ビジターセンター

開所(予定)　5月1日(木)

編集後記

2月、尾瀬は吹雪の日が多くなり、積雪は2メートルを超えました。気温-20℃前後の厳しい寒さの中、生物達はじっと春の訪れを待っています。3月中旬には、除雪隊を編成し、山の鼻ビジターセンターの屋根等の雪下ろしに入ります。

(笹)

みんなの尾瀬を
みんなで守り
みんなで楽しむ

「尾瀬ビジョン」基本理念

はるかな尾瀬

財団法人 尾瀬保護財団機関誌
2008.03 平成20年3月12日発行
発行所:財団法人 尾瀬保護財団

〒371-8570 群馬県前橋市大手町1-1-1
TEL.027-220-4431/FAX.027-220-4421
E-mail info@oze-fnd.or.jp ホームページアドレス http://www.oze-fnd.or.jp

本誌は、尾瀬の木道をリサイクルした再生紙と環境にやさしい再生植物油インキを使用しています。